

「抱護」と沖縄の村落空間

—伝統的地理思想の環境景観学—

'Embraced protection (Hougo)' and Village Spatial Planning in Okinawa

- A Landscape Architecture Study of Traditional Geographic Thought-

鎌田 誠史 武庫川女子大学 准教授
山元 貴継 中部大学 准教授
浦山 隆一 富山国際大学 客員教授

Seishi Kamata Associate Professor,
Mukogawa Women's University
Takatsugu Yamamoto Associate Professor,
Chubu University
Takakazu Urayama Professor,
Toyama University of International
Studies.



図1 平得村・真栄里村およびその周辺の1945（昭和20）年ごろの米軍撮影空中写真（沖縄県公文書館蔵）

概要

森林・地形を巧みに利用する防災の思想・技術＝「抱護（ほうご）」。それは18世紀の政治家・蔡温（さいおん）によって琉球列島に広く定着し、風水思想とも絡み合いながら近世琉球の環境・景観を形成してきた。本書は、いまや失われつつある琉球列島の「抱護」を史料や実地調査をもとに復元整理、その意義を新たな環境・生態概念へとつなげる試みである。

1. 書評（沖縄タイムス紙/2019年7月13日の朝刊に掲載。神戸芸術工科大学・学長・齊木崇人氏）

「蔡温の知」と「フクギの情」が語る琉球の「抱護」

人は、なぜそこに集まり住み続けるのか。その環境をどのように解釈し、生産可能な土地を選び、配分し、住まいを作り、樹木を植え、祭祀を行い、営みを続けてきたのか。10年間、琉球列島の集落をめぐる、人間の生存の根源的課題を「抱護の世界観」としてまとめた至極の結晶である。森林学、地理学、



図2 書籍の写真

キーワード：環境景観学、琉球列島、抱護、伝統的地理思想、村落空間

考古学、近現代史、文化人類学、建築学、と多岐にわたる研究者が、共に訪れた集落の村立ての痕跡を共有し、集落の人々と対話する。

浦山隆一の「集落と御嶽」、仲間勇栄の「蔡温とフクギ」、鎌田誠史の「村落の構造」、安里進の「地図と村落観」、高良倉吉の「琉球史とアジア」、澁谷鎮明の「東アジアの風水思想」、山元貴継の「格子状集落の成立」などを巡る研究成果を、「沖縄の村落観を問い直す」として学際シンポジウムが行われた。米軍撮影空中写真と最先端の可視化技術とデジタルデータを駆使し、琉球村落の形成過程を復元し、集落をめぐる琉球の「抱護」の原理を一つ一つ解明する。

「蔡温」達が森を作り、村立てを行った1700年代は、アジア諸国と活発に交流し、日本・中国との関係を維持しながら融合文化を発展させた時代で、「抱護」の世界観による最先端の村立てが行われた。

高良倉吉はこの時、新たな近世型の村落や集落の琉球風景が登場したという。仲間勇栄は、蔡温の手による多良間島の「村抱護」や、今帰仁の今泊集落、本部町の備瀬集落などのフクギは樹齢250年から100年を超え樹帯となり、冬の季節風、高潮被害、台風などの厳しい自然環境へ対応し、屋敷と集落全体を表裏一体で「抱護」しているという。

琉球には時代の最新の知を呼び込む力がある。

蔡温は、最新の知を求めた福州で世界の動きに出会い、刺激を受け「抱護」の世界観を生み出し、格子状の集落を誕生させたと言える。集落の中の生きた環境遺伝子「抱護」「格子状地割」「御嶽」を融合するフクギの樹帯が、300年を超えて現代の功罪に語りかけてくる。私は、琉球の村落に生きる「蔡温の知」と「フクギの情」から目を離せない。

2. 本書の内容

本書は、琉球列島において広く重視されてきた環境理念「抱護（ほうご）」について、その機能と形態に注目しながら、実際に各地の伝統的村落にみられてきたその立地特性と住民



図4 平得村・真栄里村の1945（昭和20年）頃の米軍撮影空中写真（加工）（済州大学校師範大学地理教育科 The Joseph E. Spencer Aerial Photograph Collection）



図5 平得村の八重山諸島村絵図（沖縄県立図書館所蔵）

の認識から、この地域における普遍的な空間形成技術および、集住環境の構成原理を明らかにすることを目指している。

この「抱護」の概念は、村落を囲む「伝統的な」人工林などにみられやすいが、これらはただの防風林ではなく、伝統的な地理思想である風水思想やそれに基づく蔡温（首里王府の三司官）の育林法、近世期の村立ての規範に反映される形で、琉球列島各地の村落の構成に大きく関わってきた。

本書では、このような「抱護」の概念自体と沖縄の近世村落の空間構成の関係について実証的な研究アプローチを行い、伝統的地理思想の環境景観学としてまとめている。

第一部では、村落を「抱護」する目的で造られたとされる「村の林」の重要性について定義している。学術的には「抱護」と称されるこうした林は、沖縄の近世村落の重要な構成要素であったものの、現在、多くが消失してしまっていることもあり、十分に学術的な把握・検討がなされておらず、その定義は未だ曖昧な部分が多い。こうした林の造成に関わる「抱護」の概念について各種文献や歴史書の検討を行い、各章で具体的に論じられる「抱護」の影響を理解するための予備知識として、その歴史的系譜と展開について総括的に論じている。また、変容の著しい伝統的村落の景観復元手法や復元作成技術のノウハウの公開・共有化を目的として、沖縄県における地籍図・土地台帳の活用方法を詳細に解説する。この研



図3 琉球列島とその周辺

究方法・復元手法の適用は、琉球列島における地域社会への貢献に留まらず、広く南西諸島や東南アジアも含めた広大なアジア全域の村落空間比較研究におけるユニバーサルコードとなる技術となることも究極の目的としている。

第二部では、「抱護」を重視してきた沖縄本島や宮古・八重山の村落空間の特徴について、なかでも近世期に村立て（創建・移動・再建）された村落を対象に、景観復元作業を通じての比較分析により、近世計画村落に共通しやすい立地選定や空間構成について、地形的立地条件との関係に注目しつつ

詳しく分析している。そして、共通してこれらの村落には、近世期に「村立て」される際に地形的な基点を拠り所としてその位置や領域が設定され、とくに領域の設定をめぐるには村落を囲む人工的な樹林帯を積極的に設けるといった、計画手法が採られていたことを見出した。そして、このような圍繞された村落空間を求めるにあたっては、周囲の丘陵や植林が「村抱護（むらほうご）」などと呼ばれて重要視され、自然環境の厳しい琉球列島において村落の生活空間域を保全する環境形成手法の前提となってきたことを実証している。

第三部では、「屋敷抱護」、「浜抱護」、「村抱護」、「間切抱護」など、その配置場所によって様々な呼び方が存在する、琉球国時代に確立された「抱護」の用法について検討を行っている。「抱護」に基づく人工林の造成は、海岸域から村落、複数の村落を囲む場合も周囲に設けられ、地形と林帯を混交して、気（乾湿度）を保全するように形成されている。その最大の目的は冬の北風や台風による強風だけではなく、外敵や害虫から屋敷や農地を守ることにあつた。このような琉球列島の近世村落の重要な空間構成要素、景観要素であった「抱護（林）」の重要性に加えて、近代における消滅過程とそのこゝろについて、また、失われつつある「抱護」の現状と保全のあり方について各地の具体的な事例を提示しながら説明している。

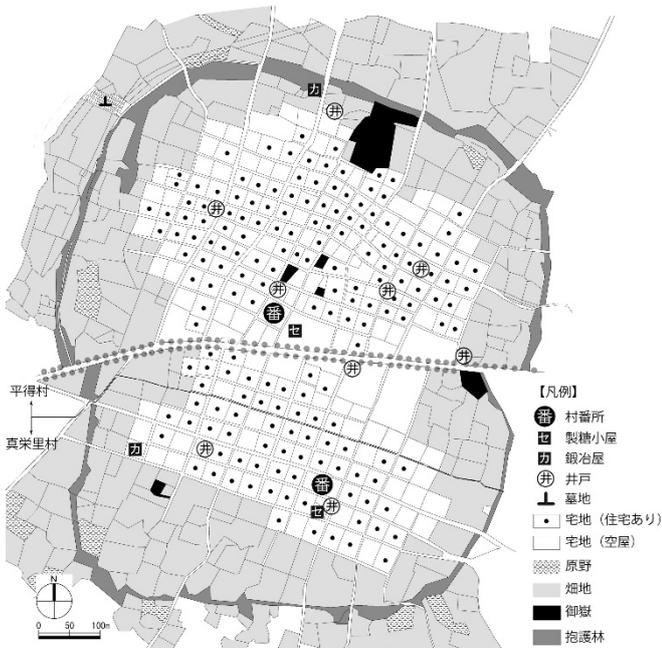


図6 明治期における平得村・真栄里村の村落空間復元図

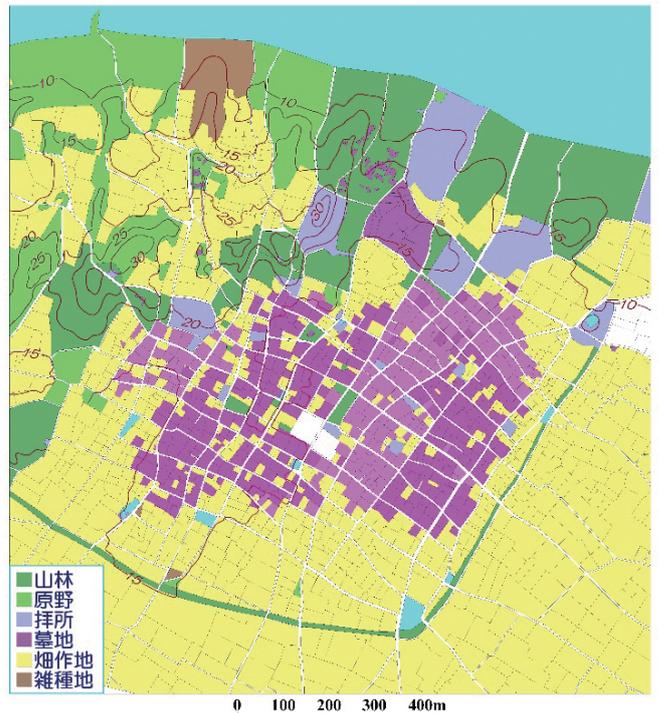


図8 1899（明治32）年頃の多良間島中心村落一帯の土地利用（地籍図・土地台帳より作成）

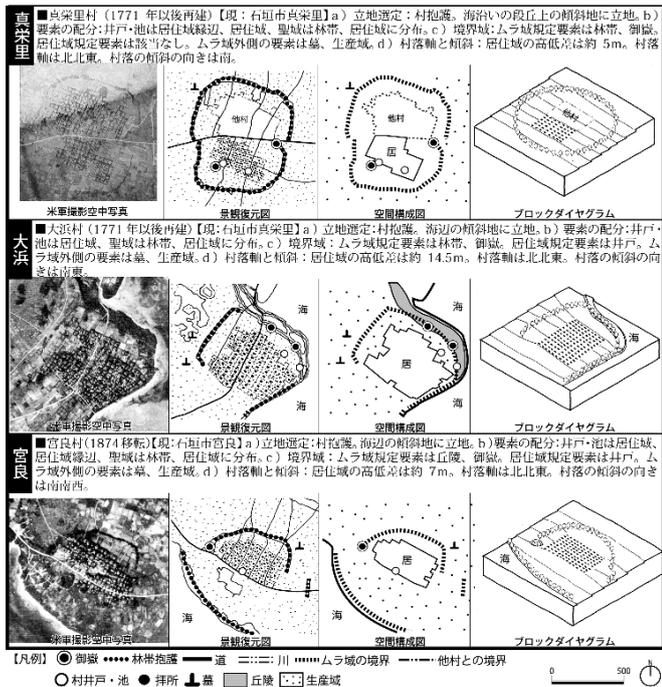


図7 村落の空間構成一覽（一部）

第四部では、筆者らが科研の研究成果を地元や研究者に還元することを目的として開催してきた二回の学際シンポジウムの記録をまとめている。ここでは、科研の研究協力者で沖縄の著名な研究者（高良倉吉、安里進）の基調講演に加えて、建築学、地理学、林学、文化人類学の複合的な専門領域を持つ研究者で構成される、筆者らの科研グループによる研究成果をまとめている。

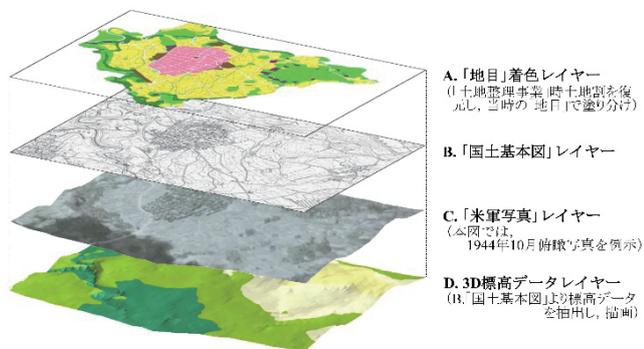


図9 玉城前川の村落に関するさまざまな図面や写真・データの重ね合わせ

第五部では、筆者らが「沖縄の集落空間における伝統的人工林「抱護」の形態と機能に関する研究」「沖縄の固有文化が持つ環境観と空間形成技術から見る集住環境の構成原理に関する研究」「明和大津波で被災した琉球諸島の集落復興プロセスから見る環境再構築に関する研究」「琉球の近世計画村落形成に村抱護と伝統的祭祀施設が果たした役割と意味に関する研究」の各科研テーマで、沖縄の村落・集住環境についての研究成果をまとめている。

これらの研究成果の公開において、とくに本書では、琉球列島に広く存在した伝統的な地理思想に基づく環境理念「抱護」と各村落の関わりに注目しながら、琉球の近世計画村落の空間形成原理を探究している。かつての沖縄村落研究において十分に上げられていたとはいえなかった「抱護」と村落構造との関係に関する研究の新成果（科研成果）を、建築学、地理学、林学の分野に限らず、沖縄・東アジアに関する研究者に広く発信することを目的としている。

とくに本書では、近代以降の著しい変容を経験した琉球列島の村落を対象に、復元根拠資料の重ね合わせはもちろんのこと、三次元モデル的に把握した地形条件との重ね合わせまでを重視した景観復元を行い、これに現地調査を加えるという実証的な研究アプローチによって、可視的な空間比較研究のモデルを提示している。これは、本書刊行の大きな意義といえる。加えて、これまで地域ごとの研究者が個別の視点を反映させた個別の手法によって検討を行うことの多かった沖縄各地の伝統的村落の研究に対して、本書は琉球列島全域を対象に、伝統的村落の立地特性と普遍的な空間形成技術を明らかにし、この地域における集住環境の構成原理を求めようとしている点において沖縄・東アジアの学術の振興と普及に資する学術的価値を有するといえる。

3. 本書の目次

序文

- 第一部 沖縄の近世村落形成に関わる「抱護」
 - 第一章 沖縄の近世村落と「抱護」
 - 第二章 「抱護」の概念と抱く世界観
 - 第三章 沖縄県における地籍図・土地台帳とその活用
- 第二部 「抱護」を抱く琉球の村落
 - 第一章 八重山諸島・石垣島の村落構造と「抱護」
 - 第二章 沖縄本島・勝連の村落構造と「抱護」
 - 第三章 沖縄本島・玉城前川の村落構造と「抱護」
 - 第四章 琉球列島の村落と「抱護」の展開
- 第三部 失われた「抱護」と生き続ける「抱護」
 - 第一章 八重山諸島・石垣四箇村の「抱護」と近・現代
 - 第二章 天然記念物に指定された宮古諸島・多良間島の「抱護」
 - 第三章 危機的状況下にある沖縄の「抱護」の現状と保全のあり方
- 第四部 生き続ける琉球の村落—学際シンポジウムの記録
 - 第一章 第一回学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落—固有文化にみる沖縄の環境観と空間形成技術」
 - 第二章 第二回学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落—沖縄の村落観を問いなおす」
- 第五部 科研成果報告
 - 第一章 沖縄の集落空間における伝統的人工林「抱護」の形態と機能に関する研究
 - 第二章 琉球の近世計画村落形成に伝統的祭祀施設と村抱護が果たした役割と意味に関する研究
 - 第三章 沖縄の固有文化が持つ環境観と空間形成技術から見る集住環境の構成原理に関する研究
 - 第四章 明和大津波で被災した琉球諸島の集落復興プロセスから見る環境再構築に関する研究
 - 第五章 研究成果リスト

あとがき

4. あとがき

本書は、日本学術振興会の科学研究費助成事業科学研究費補助金「沖縄の集落空間における伝統的人工林「抱護」の形態と機能に関する研究」（基盤研究 B・平成 21-23 年度、研究代表者：浦山隆一）、「沖縄の固有文化が持つ環境観と空間形成技術から見る集住環境の構成原理に関する研究」（基盤研究 B・平成 22-24 年度、研究代表者：鎌田誠史）、「明和大津波で被災した琉球諸島の集落復興プロセスから見る環境再構築に関する研究」（基盤研究 C・平成 25-27 年度、研究代表者：鎌田誠史）、「琉球の近世計画村落形成に村抱護と伝統的祭祀施設が果たした役割と意味に関する研究」（基盤研究 B・平成 25-28 年度研究代表者：浦山隆一）の調査研究とそれらの成果発表として沖縄県立博物館・美術館にて 2 回にわたる学際シンポジウムの開催、沖縄県地域史協議会での招聘講演、これらの書籍化に加えて、建築学会等における論文投稿や研究発表、地元機関紙へ連載してきた研究成果を骨

子とし、大幅な編集を行ったものである。

2009年から始まった一連の沖縄研究においては、研究チームを結成して研究を進めてきた。本書の編者や執筆者を含む研究メンバーの専門は建築学、歴史地理学、人文地理学、林学、歴史学、考古学などで極めて学際的な研究組織となった。このような研究メンバーが琉球列島において広く重視されてきた環境理念「抱護」と沖縄の村落空間について様々な専門領域から考察し、沖縄の伝統的地理思想の環境景観学として探究し続けてきたことに大きな意義があるといえる。約10年もの長期において研究チームが維持できたのは、ひとえに本書の編集者のひとりである浦山隆一（たけのり）の努力と配慮に依るところが大きい。もちろんメンバーで夜な夜な酌み交わした酒とそこでの熱い議論の積み重ねが本書を刊行できた大きな要因といえる。

なお、私事ながら沖縄を研究対象として見つめるようになったきっかけは1998年から首里城をはじめとする世界遺産周辺整備の一連の整備に携わる機会を得て、沖縄の歴史的な集落景観に強く興味を抱くようになった。さらには沖縄の集落を対象に学位論文としてまとめたことが現在まで至る私の沖縄研究の礎となっている。その後の沖縄研究において本書の執筆者でもある仲間勇栄、高良倉吉、安里進先生に多大な影響を受け、自身の沖縄の村落研究においてその方向に明快な展望を与えていただいたことを特に明記しておきたい。

また、本書の編者、執筆者である浦山隆一、渋谷鎮明先生そして私は齊木崇人先生（神戸芸術工科大学・学長）の門下生である。本書の成立に際しては、絶えずご指導いただき、育てていただいた齊木先生の学恩に感謝したい。集落研究の基礎から研究の進め方や視点、フィールドワークの手法はすべて齊木先生の影響を受けている。

本書は先に述べたシンポジウムや学会投稿の内容を掲載するだけでなく、これまでの研究で得た研究ノウハウの公開や琉球列島の村落をとりまく研究を今一度紹介し、まとめたいと考え、研究メンバーの先生方に相談し快諾いただいた。幸い執筆者各位の努力によって本書の目標は達成できたものと編者を代表して執筆者の皆様には衷心よりお礼申し上げたい。

今後の沖縄における集落研究は、新しい展開を期待したい。とくに沖縄の歴史資料や集落の歴史的な痕跡が去る大戦によって灰燼に帰したことやその後の開発などで変容の著しい琉球列島の集落において伝統的村落の景観復元により詳細に考察した研究成果を集録できたのは本書の大きな意義ではないだろうか。

現在、我々の研究チームはこのような手法を用いてその研究範囲を広く琉球弧（南西諸島）へ拡大を目指して研究を進めている。琉球・沖縄はかつて、現在の沖縄本島・先島（琉球列島）だけで成り立っていたのではなく、さらに北の奄美群島、トカラ列島、薩南の島嶼を経て、明らかに九州とも連結していた。次なる研究は、これまでの研究蓄積の活用も可能である琉球弧全域の伝統的村落について、三次元モデルを通じた地形条件の相違分析までを可能とする統一手法による景観復元作業を行い、同地域の伝統的村落空間の地域を越え

た集住環境形成技術の普遍的原理と、地域固有のエコロジカルな環境観とを考究するものである。一方で、とくに沖縄・先島諸島の非「格子状」集落の空間構造と変容過程の研究にも取り組んでいる。これは不規則的宅地割集落部分と聖域（御嶽・ムトウ）の祭祀場所を含めた非「格子状」形態に着目して、集落の形成・変容過程を調査するとともに、伝統的祭祀施設の復元的研究にも取り組むことで、古琉球時代の廃村遺構を含めて近世期にも引き継がれた非「格子状」集落の構成秩序を探究するというものである。つまり、琉球王国時代の最大版図であった琉球弧を対象とした計画村落の総合的比較を行う広い視点と、古琉球時代の廃村遺構の発掘を含めた詳細な検討を行う深い視点による研究のふたつのアプローチによって研究を進めていくことで、沖縄の伝統的村落が持つ普遍的な原理の究明を目指した新たな村落研究の地平を切り開く研究となることを目指している。

そして最も大切なことは、このような研究成果は、急速に失われつつある環境形成技術の固有価値をいかした集住環境再構築の実践に還元することである。人口減少社会の到来に備えて自然環境にも対応した集住環境のダウンサイジング（コンパクトな空間活用）や、安定した集住環境の立地選定による「リスクリダクション（危険低減）」、歴史的景観に配慮した景観形成への方途を提言することが、我々の研究における究極の目的となる。

最後に本研究は、今まで記してきた方々のご指導と支援なくしてはなしえなかったものである。また、本書では、フィールドワークに基づく資料が構成の重要な部分を占めているが、これらは地元の方々や関係機関の方々のご厚意なくしては、決して得られることのできないものであった。ここにお名前をあげられなかった大勢の方々を含め、今までご教示・ご協力をいただいたすべての方々に、改めて御礼申し上げたい。本書が、皆様のご指導やご期待に、少しでも応えるものになっていれば幸いである。

なお、本書の出版には、日本学術振興会平成30年度科学研究費助成事業科学研究費補助金（研究成果公開促進費、課題番号18HP5237、代表者：鎌田誠史）の助成を受けた、編集作業については、株式会社風響社の石井雅氏のご助力を得た、末筆ながら心より感謝申し上げたい。

執筆者紹介

●編集・執筆

鎌田誠史（かまたせいし）、武庫川女子大学准教授、1973年生。博士（芸術工学）。神戸芸術工科大学大学院博士課程満期退学。株式会社国建建築設計部、神戸芸術工科大学大学院助手、国立有明工業高等専門学校准教授を経て現職。主な論文・作品等：日本建築学会計画系論文集『地形的立地条件から見た琉球列島における村落の空間構成に関する研究—近世期に発生した計画的村落の形態類型を通じて—』2016年。首里城復元整備や喜多番所再現整備をはじめとする沖縄県の世界遺産及びその周辺整備、神戸市の自然住宅地「ガーデンシティ舞多聞」プロジェクト、数多くの建築設計やまちづく

りに従事。専門分野：建築デザイン、地域計画・保存・再生デザイン。

山元貴継（やまもとたかつぐ）、中部大学准教授、1972年生。博士（地理学）。名古屋大学大学院文学研究科博士課程満期退学、中部大学国際関係学部非常勤講師、中部大学人文学部講師を経て現職。主な著作等：「日本統治時代の韓国・済州島における日本人経営果樹園」人文地理 62巻2号、2010年。「岐阜県高山市におけるアニメ・ツーリズム」（共著）都市地理学 11号、2016年。『名古屋の“お値打ち”サービスを探る』風媒社、2010年。『軍港都市史研究 VI 要港部編』（分担執筆）清文堂、二〇一六年。『離島研究 VI』（分担執筆）海青社、2018年。専門分野：歴史地理学、文化地理学、アジア地域研究

浦山隆一（うらやまたかかず）、富山国際大学客員教授、1947年生。博士（芸術工学）。名古屋大学大学院工学研究科修士課程修了、設計事務所ゲンブラン・有理化、職業能力開発大学校助教授、富山国際大学教授を経て現職。主な著書等：日本建築学会編『総覧 日本の建築—中国・四国—』（共同執筆）新建築社、一九九八年。刈谷勇雅ほか編『日本の町並み調査報告 27 四国地域の町並み 〈2〉』『伊野地区伝統的建造物群（高知県）』（共著）海路書院、2008年。中島恭一ほか監修『東アジア地区の歴史文化と現代社会』『沖縄の近世集落形成に関わる抱護林について』（共筆）桂書房、2012年。専門分野：建築計画・設計、地域計画・都市空間デザイン、建築人類学。

●執筆

仲間勇栄（なかもゆうえい）、琉球大学名誉教授、1948年生。農学博士（九州大学）。九州大学大学院農学研究科中退。琉球大学農学部助手、農林経済科学分野教授を経て現職。主な著書：『増補改訂沖縄林野制度利用史研究』（メディア・エクスプレス、2011年）。Bixia Chen & Yuei NAKAMA. 2012. Traditional Rural Landscapes in Island Topography in East Asia. Nova Science Publishers, Inc. New York. 『島社会の森林と文化』（琉球書房、2012年）。『蔡温と林政八書の世界』（榕樹書林、2017年）。沖縄研究奨励賞、日本林業経済学会学術賞、沖縄タイムス出版文化賞、など受賞。専門分野：森林政策学、森林史、森林文化。

高良倉吉（たからくらよし）、琉球大学名誉教授、1947年生。博士（文学）。愛知教育大学卒業。沖縄史料編集所専門員、沖縄県立博物館主査、浦添市立図書館長、琉球大学法文学部国際言語文化学科教授、沖縄県副知事を経て現職。主な著書、編著に『琉球の時代——大いなる歴史像を求めて』（筑摩書房、1980年）、『琉球王国の構造』（吉川弘文館、1987年）、『琉球王国史の課題』（ひるぎ社、1989年）、『琉球王国』（岩波新書、1993年）、『アジアのなかの琉球王国』（吉川弘文館、一九九八年）、『琉球王国史の探求』（榕樹書林、2011年）など多数。

首里城復元の委員、NHK大河ドラマ『琉球の風』の監修者。専門は、琉球史。特に琉球王国の内部構造、アジアとの交流史を研究。

安里進（あさとすすむ）、元沖縄県立博物館・美術館館長、1947年生。琉球大学法文学部史学科卒業。大阪府教育委員会、浦添市文化部長、沖縄県立芸術大学教授などを経て、沖縄県立博物館・美術館館長。主な著書等：平井松午・安里進・渡辺誠編『近世測量絵図のGIS分析』（共同執筆）（古今書院、2014年）。『沖縄人はどこから来たか（改訂版）』（共著）（ボーダーインク社、2011年）。『琉球の王権とグスク』（山川出版社、2006年）。『沖縄県の歴史』県史 47（共著）、（山川出版社、2004年）。『グスク・共同体・村』（榕樹書林、1998年）。『考古学からみた琉球史』上・下、（榕樹書林、1990・91年）。専門分野：考古学・琉球史・漆工史・測量と地図史。

澁谷鎮明（しぶやしずあき）、中部大学教授、1963年生。博士（地理学）。名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程修了。著書等：『アジアの時代の地理学—伝統と変革—』（古今書院、2008年）、『現代韓国の地理学』（共著）（古今書院、2010年）、『自然と人間の環境史』（共著）、（海青社、2014年）、『人文地理学辞典』（共著）、（丸善出版、2013年）、『東アジア風水の未来を読む：東アジアの伝統知識風水の科学化』（共著）（韓文）、（GEOBOOK（ソウル）、2016年）。専門分野：韓国地域研究、人文地理学、東アジア文化論

書籍紹介

出版社 株式会社風響社

出版年月日 2019年2月20日

ISBN 9784894892552

判型・ページ数 A5・384ページ

定価 本体5,000円＋税